

2019年2月21日／浪宏友ビジネス縁起観塾

苦の根本的解決

1. 概要

(1) 資料

増谷文雄著『阿含経典2』（ちくま学芸文庫）／実践の方法（道）に関する経典群／諦相應／5如来所説（部分）、6蘊、7処

(2) 主題

四つの聖諦の内容を学び、苦の根本的な解決について、理解を深めたいと思います。

2. 四つの聖諦

(1) 経文「蘊」、「処」

かようにわたしは聞いた。

ある時、世尊は、バーラーナシー（波羅捺）のイシパタナ・ミガダーヤ（仙人住処・鹿野苑）にましました。

その時、世尊は、比丘たちに告げて仰せられた。

「比丘たちよ、四つの聖諦がある。その四つとは何々であろうか。それは、苦についての聖諦、苦の生起についての聖諦、苦の滅尽についての聖諦、および、苦の滅尽にいたる道についての聖諦である」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 290、p. 292）

(2) 四つの聖諦

経文「蘊」、経文「処」の冒頭です。ここに次の四つの聖諦が述べられています。「諦」とは「明らかにする」という意味です。

① 苦についての聖諦

自分の苦しみを明らかにするのです。

苦悩している自分を理性的に観察し、何をどのように苦しんでいるのかを解明するのです。

② 苦の生起についての聖諦

自分の苦しみの原因を明らかにするのです。

苦しきは、いくつもの原因が重なって生じるものです。

原因が判明しても、自分の手の届かないものであれば、自分にはどうにもなりません。

しかし、自分が苦しんでいるときは、原因の少なくとも一つは、自分にあるものです。自分にある原因なら、自分の取り組みで何とかすることができます。

したがって、「苦の生起の聖諦」は、自分にある原因を明らかにすることが中心になります。

③ 苦の滅尽についての聖諦

自分の中にある原因を滅すれば、自分の苦しみが消滅することを明らかにするのです。

- (a) 自分の中にある原因が消滅すると、他の原因も消滅して、自分の苦悩がなくなることがあります。

友人と仲たがったとき、自分の非を認めて謝罪したら、相手も非を認めて謝罪してくれて、より以上に仲良くなったというようなことがあります。

- (b) 自分の中にある原因を滅すれば、他の原因が継続していても、自分の苦悩はなくなります。

失礼なことばかり言う同僚に腹を立てていたけれど、同僚の言動に対する受け取りかたを変えたら、いくら失礼なことを言われても腹が立たなくなったということがあります。

④ 苦の滅尽にいたる道についての聖諦

自分の中にある原因を滅するためには、自分は何をすればいいのかを明らかにするのです

具体的には、ケース・バイ・ケースですが、原理的には、釈迦牟尼世尊によって説かれた、

八支の聖道（正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定）が、基準になります。

2. 苦の聖諦

(1) 経文「如来所説」

「さて、ところで、比丘たちよ、苦の聖諦とはこれである。いわく、生は苦である。老は苦である。病は苦である。死は苦である。歎き・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みは苦である。怨憎するものに遇うは苦である。愛するものと別離するは苦である。求めて得ざるは苦である。総じていえば、この人間の存在を構成するものはすべて苦である」

(増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、284)

(2) 経文「蘊」

「比丘たちよ、では、苦についての聖諦とは何であろうか。それは、五つの人間の生活を構成する要素である、ということができる。いわく、色（肉体）なる要素、受（感覚）なる要素、想（表象）なる要素、行（意志）なる要素、および、識（意識）なる要素である。比丘たちよ、これを名づけて苦についての聖諦となすのである」 (増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 291)

(3) 経文「処」

「では、比丘たちよ、苦についての聖諦とはどういうことであろうか。それは、人間の内なる六つの感官の領域であるということができる。では、その六つとはなんであるか。眼の領域・耳の領域・鼻の領域・舌の領域・身の領域・意の領域である。比丘たちよ、これを名づけて苦についての聖諦というのである」 (増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、293)

(4) 経文「如来所説」における苦

① 「生は苦である」とあります。

受精から出生するまでの苦しみとされています。この間に数々の危機があり、無事出生することが至難であることを言っているのでありましょう。

② 「老は苦である」とあります。

自分が老いるにしたがって、体力の衰え、精神力の衰え、それに伴うさまざまな能力の衰えなどがあって、苦悩するのでありましょう。

③ 「病は苦である」とあります。

自分に、身体的な傷病、精神的な病いなどが生じると、そのための苦痛はもとより、不安や焦りなどに襲われ、苦悩が増大することもあります。

④ 「死は苦である」とあります。

死によって自分が居なくなるという恐怖、死の向こうに何があるか分からないという不安や恐怖などが苦悩を生むのでありましょう。

自分の死後、残された者たちが、自分の思う通りに振る舞ってくれるかどうかと悩み苦しむこともあるようです。

⑤ 「歎き・悲しみ・苦しみ・憂い・悩みは苦である」とあります。

自分の意に沿わない出来事に遭遇して、このような感情が生じるのでありましょう。いわゆる、思うに任せない苦しみです。

⑥ 「怨憎するものに遇うは苦である」とあります。怨んでいる相手、憎んでいる相手と顔を合わせるのは苦しみであるとあります。

日常生活の中で、出会いたくない人に、まったく出会わずにいることは、ほぼ不可能です。日常的な人間関係の苦しみの多くは、この苦しみではないでしょうか。

⑦ 「愛するものと別離するは苦である」とあります。この場合の「愛」は「執着」です。

いつまでも離れないで自分の傍らに居てもらいたい人（その理由はさまざまでしょうが）が、離れていく苦しみです。

⑧ 「求めて得ざるは苦である」とあります。

物、お金、社会的地位、権力、名声、人の愛情などなどを求め、手に入らないといって苦しむのです。すでに十分足りていてさえも、さらに求めて、手に入らないと苦しむこともあります。求めて得ざる苦しみは、際限がないと言われています。

⑨ 「総じていえば、この人間の存在を構成するものはすべて苦である」とあります。

「人間の存在を構成するもの」は、経文「蘊」において説かれる「五蘊」、経文「処」において説かれる「六処」です。

(5) 経文「蘊」における苦

- ① 色（肉体）なる要素が苦であるとあります。色すなわち肉体に生じる苦です。
肉体には、病気、怪我その他のさまざまな苦痛が生じます。肉体に生じるこれらの苦痛を「苦苦」と言います。
「苦苦」は、迷いの中にある人々も、悟りを得た人々も同じように味わうとされています。
- ② 受（感覚）なる要素が苦であるとあります。受すなわち感覚に生じる苦です。
受には「苦受・楽受・不苦不楽受」があるとされています。
執着・渴愛を持った人には「楽受」も苦であると言われます。執着・渴愛による楽（幸福）は、やがて苦（不幸）に変わっていくからです。
- ③ 想（表象）なる要素が苦であるとあります。想すなわち表象に生じる苦です。
表象にも、苦の表象、楽の表象、不苦不楽の表象があると思います。
執着・渴愛を持った人が思い描く「楽の表象」は、やがて「苦の表象」になってしまいます。
- ④ 行（意志）なる要素が苦であるとあります。行すなわち意志に生じる苦です。意思決定における苦と考えてよいと思います。
変化し続ける世間における、意思決定は迷いの連続で、これだけでも苦です。
執着・渴愛による意思決定は、楽を求めての意思決定だと思いますが、執着・渴愛によって楽を求めることは、つきつめれば苦を求めているのです。
- ⑤ 識（意識）なる要素が苦であるとあります。識すなわち意識に生じる苦です。意識とは、自分を認識することです。
執着・渴愛による自己認識は、自己錯誤を招き、そこから苦が生じます。

(6) 経文「処」における苦

「眼の領域・耳の領域・鼻の領域・舌の領域・身の領域・意の領域」が苦であるとあります。
迷っている人は、目で見えるもの、耳で聞くもの、鼻で嗅ぐもの、舌で味わうもの、身で触るもの、心に思い描くものに執着し、渴愛を起こし、そこから苦悩を生じるので、このように言っているのだと思います。

3. 苦の本質

苦は、多種多様な様相を呈していますが、その本質は何でしょうか。

「久遠実成の本仏に生かされているかぎりには、そのみ心のおりに生きることが正しい生きたかだ」（庭野日敬著『法華三部経 各品のあらましと要点』佼成出版社、p.169）という観点に立てば、本仏のみ心のおりに生きていないことが、「苦の本質」なのではないでしょうか。そこから、あらゆる、具体的な苦が生じてくるからです。

3. 苦の生起の聖諦

(1) 経文「如来所説」

「さて、ところで、比丘たちよ、苦の生起の聖諦はこうである。いわく、迷いの生涯を引き起し、喜びと貪りを伴い、あれへこれへと絡(から)まりつく渴愛がそれである。すなわち、欲の渴愛・有の渴愛・無有の渴愛がそれである」(増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、284)

(2) 経文「蘊」「処」

「比丘たちよ、では、苦の生起についての聖諦とは何であろうか。それは、迷いの生涯を引き起し、喜びと貪りとを伴い、あれへこれへと絡まりつく渴愛である。すなわち、欲の渴愛・有の渴愛・無有の渴愛がそれである。比丘たちよ、これを名づけて苦の生起についての聖諦となすのである」(経文「処」では、「何であろうか」が「どういうことであろうか」となっています)(増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.291、p.293)

(3) 渴愛

① 「苦の生起の聖諦」は、いずれの経文も、「迷いの生涯を引き起し、喜びと貪りを伴い、あれへこれへと絡(から)まりつく渴愛がそれである」とあります。

これにより、苦の根本原因は渴愛であることが分かります。

② 渴愛の性質が三つ上げられています。

- ・渴愛は、迷いの生涯を引き起こします。

渴愛は、智慧のはたらきの障害となりますので、迷いの生涯を引き起こすのです。

- ・渴愛は、喜びと貪りを伴います。

渴愛が満たされると喜びが生じ、喜びが生じると貪りが生じます。これによって、ますます渴愛が深まります。

- ・渴愛は、あれへこれへと絡まりつきます。

渴愛は、あれも欲しい、これも欲しいと広がり、もっと欲しいと深まります。

(4) 三つの渴愛

① 欲の渴愛・有の渴愛・無有の渴愛とあります。

これと同じ意味だと思われる「欲愛・有愛・無有愛」について、増谷文雄博士の解説があります。

欲 愛(欲の渴愛) 性欲の激情である。

有 愛(有の渴愛) 生存欲の激情である。

無有愛(無有の渴愛) 自己優越の欲望の激情である。

② 要するに、人は、自分にまつわることなら、何にでも欲を起し、渴愛を生じるということでありましょう。

4. 苦の滅尽の聖諦

(1) 経文「如来所説」

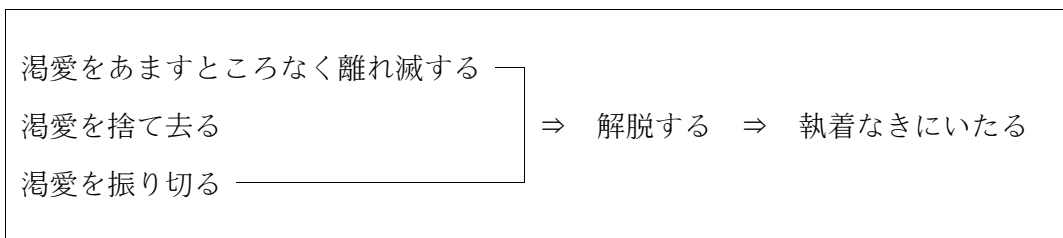
「さて、ところで、比丘たちよ、苦の滅尽の聖諦はこうである。いわく、その渴愛をあますところなく離れ滅して、捨てさり、振り切り、解脱して、執著なきにいたるのである」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、284）

(2) 経文「蘊」「処」

「比丘たちよ、では、苦の滅尽にいたる聖諦とは何であろうか。それは、その渴愛をあますところなく離れ滅して、捨て去り、振り切り、解脱して、執著なきにいたるのである。比丘たちよ、これを名づけて苦の滅尽についての聖諦となすのである」（経文「処」では「苦の滅尽にいたる」が「苦の滅尽についての」となっています）（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.291、p.293）

(3) 渴愛を滅する

① 苦の滅尽のためには、渴愛を徹底的に滅するほかないことが、ここに示されています。



② 「解脱」とは、解放されること、解き放たれることです。渴愛を余すことなく滅することによって、渴愛から解放され、解き放たれるのが「解脱」です。

5. 苦の滅尽にいたる道の聖諦

(1) 経文「如来所説」

「ところで、さて、比丘たちよ、苦の滅尽にいたる道の聖諦はこうである。いわく、聖なる八支の道である。すなわち、正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定である」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、284）

(2) 経文「蘊」「処」

「では、比丘たちよ、また、苦の滅尽にいたる道についての聖諦とは何であろうか。それは、聖なる八支の道である。すなわち、正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定である。比丘たちよ、これを称して苦の滅尽にいたる道についての聖諦というのである」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.291、p.293）

(3) 八正道

- ① 「苦の滅尽にいたる道」とは、「渴愛を滅し尽くす道」にはかなりません。
- ② 渴愛を滅し尽くす道は、八正道（正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定）であることが、ここに示されています。

6. 勉勵の勧め

(1) 経文「蘊」「処」

比丘たちよ、これが四つの聖諦である。だからして、比丘たちよ、〈こは苦なり〉と勉勵するがよい。〈こは苦の生起なり〉と勉勵するがよい。〈こは苦の滅尽なり〉と勉勵するがよい。また、〈こは苦の滅尽にいたる道なり〉と勉勵するがよいのである」（増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 291~292、p. 293~294）

(2) 四つの聖諦の勉勵

四つの聖諦の目的は渴愛を滅尽することであり、その方策は八正道を実践することであると分かりました。

この後、日常的に、四つの聖諦を実践していけば、現実に渴愛を滅尽し、解脱することができるはずですよ。

釈迦牟尼世尊が、修行者たちに、勉勵するがよいと強く勧めているのは、早く苦悩から脱して再び苦悩に戻らないようになりなさいという、深い愛情からでありましょう。

7. 修行の目的

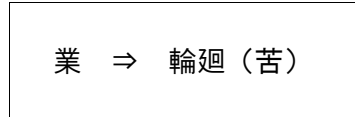
(1) 古代インドの人びとの考え

古代インドでの人びとは、「業によって輪廻する」と考えていたといひます。

「輪廻」とは、苦の世界をさまようことでありましょう。

「業」とは、輪廻の原因となる行ないのことです。

したがって、古代インドにおける修行の目的は、輪廻の原因となる業を滅することに置かれることとなります。



(2) 仏教の場合

仏教では、「業によって輪廻する」という考えかたを受け入れつつも、さらに深く、「渴愛によって業が生じる」ことを観ています。

このため仏教では、輪廻の原因となる業を行なわないように気をつける修行もしますが、根本的には、渴愛を滅することを目的として修行することとなります。

